



足寄町立足寄中学校

教諭 山田 優里

わたしの 授業実践

～「言葉って面白い」
を引き出すために～

■はじめに

国語科の教員である私の胸に常にあるのは、「語彙や言語感覚の豊かな人に成長してほしい」という子どもたちへの思いです。言葉とは基本的に、自分で創り出すものではなく、既にこの世界にあるものの中から選び、紡いでいくものです。そのため、子どもが未知の言葉に触れ、それを自分のものとする機会をできるだけ多く設けることが、私の役目の1つです。ただ、教員から一方的に語句を教え込むのは、最善とはいえません。「こういうことが言いたい」「こんな意味の言葉ってなかったっけ?」と子ども自身が言葉が必要としたときにこそ、本物の語彙として吸収されていくのだと考えています。だからこそ、日々自分の周りにある様々な言葉を集めたり、思いや考えを言葉で表現したりする楽しさを感じられるような仕掛けを作ることが大切にしています。まだまだ勉強中の身で、難しい話はできませんが、子どもが「言葉って面白い!」と感じられるために取り入れている活動を2つ紹介させていただきます。

■辞書を活用したゲーム

「コトバト」

まずは「コトバト」です。これは、『さ』から始まる長いもの』のようなお題に最も合う言葉を辞書から探し出し、発表し合うゲームです。最短距離で結果に辿り着けるweb検索と違い、さまざまな言葉に寄り道ができるという辞書のよさを生かしたルール設定が魅力です。小学館によるルール説明の動画やお題メーカーが利用できるので、事前準備が手軽というのも、教員としてはありがたい点です。

例えば、前述したお題で実際に行うと、「長さ」を「文字数の多さ」と捉えて「三人寄れば文殊の知恵」を挙げると子どももいれば、「歴史の長さ」と捉えて「サンタクロース」を挙げる子どももいます。ここに「(大名行列そのものの)見た目も歴史も長いです!」

と「参勤交代」が挙げた後、別の子どもが「みんなの『長い』は過去ばかりですね」と自信に満ちた表情で「先」を挙げると、教室は感嘆の声であふれました。

このゲームは、条件に合う言葉を見つけるのはもちろん、共感を得られる



よう説明する力も求められます。お題である「長い」のように、言葉自体を多義的に捉える力を養うということにもつながっている気がします。

また、公式ルールでは個人戦となっていますが、授業で行う際にはグループ対抗で行っています。グループ内でお題に合った言葉を検討し、代表者が全体へ発表するという流れです。学力に関係なく、一人のひらめきが生かされたり、グループで内容を整理してからの発表となるため誰が代表者になっても自信をもって発表ができたりと、メリットの多さを感じています。

言葉を集めたり、表現したりする

楽しさを感じられるような仕掛けを作る。

■しりとり×カードゲーム

誰もが遊んだことのあるしりとりをカードゲーム形式にした活動も取り入れています。ひらがなや数字が書かれたカードを使って行うゲームです。場にあるカードの文字で始まり、手札にある文字、あるいは文字数で終わる言葉を言いながらカードを出していきま



例えば、場に「あ」のカードがあり、手札に「つ」があるとします。

この場合は、「あいさつ」と言いながら「つ」のカードを出すことができます。「7+(7文字以上の言葉の意)」のカードの場合は、「アイスクリーム」などとして使えます。早い者勝ちで手札を出していき、初めに使いきった人が勝ちというゲームです。

「ワードバスケット」というカードゲームに着想を得ていますが、授業で行う際にはよりシンプルなルールにしています。

ゲームの後には必ず、いわゆる「感想戦」の時間を確保しています。使いづらかったカードについて意見交流をしたり、条件に当てはまる言葉があるか調べたりして、記録しておく時間です。この場合は、タブレット端末を利用して調べるのが効率的です。また、他教科の教科書を参照することも許可しています。いつも使っている教科書も、言葉への解像度が上がった状態だと、普段と違って見えてくるという面白さを体感してもらえます。

授業の後には、「あー！『ホワイトボード』って7文字だ！近くにあった！』『へ』で終わる言葉って少ない？地名とかならあるのかな？」「次

■おわりに

当たり前ですが、これらの活動は毎回行っているわけではありません。子どもにとって惰性や暇つぶしになってしまつては、「活動あつて学びなし」という事態を招きます。そうならないように、活動のねらいを明確に伝えることや、行うタイミングを見計らうことも大切になっています。子どもにとって、机に向かって問題に取り組むことだけが勉強ではない、学びのヒントは日常生活に転がっているということに気付くきっかけづくりになればと思います。学ぶ楽しさや面白さを伝えるという教員としての使命を果たすべく、これからも努めていきます。



回ええそうな言葉を探しながら帰ります」と話す様子が見られます。言葉へのアンテナが高まっている子どもの姿を見ると、教員としてうれしさがこみ上げるとともに、この意欲を決して無駄にすることのない、実りある学習活動をしていかなければならないと気持ち引き締まります。

日常生活に転がる学びに気付く

きっかけづくりとしての授業を作りたい。

